

企画者たちの読書対談

水野太貴 × 一ノ瀬翔太
(ゆる言語学ラジオ) (ハヤカワ新書)

大人気YouTubeチャンネルの
パーソナリティ兼編集者、そして話題書を生発する
新進気鋭レーベルの編集長。世に独自の企画を送り出し続ける
注目の若手二人は、今までどう本と向き合ってきたのか？
初の対談でたっぷり語ってもらった。



みずの だいき 1992年生まれ、埼玉県出身。2015年早川書房入社。2023年からはハヤカワ新書の編集長を務める。担当作に、『スノウ・クラッシュ (新版)』(ハヤカワ文庫SF)、『ヒトの目、驚異の進化』『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』(ともにハヤカワ文庫NF)、『闇の自己啓発』(早川書房)、『ソース焼きそばの謎』『人間はどこまで家畜か』『ネット怪談の民俗学』『幽霊の脳科学』(すべてハヤカワ新書) などがある。



いちのせ しょうた 1995年生まれ、愛知県出身。名古屋大学文学部卒業。専攻は言語学。出版社で編集者として勤務するかたわら、2021年からYouTube、ポッドキャストチャンネル「ゆる言語学ラジオ」で話し手を務める。YouTube登録者数は46万人超。著書に『復刻版 言語オタクが友だちに700日間語り続けて引きずり込んだ言語沼』(バリューストックス・パブリッシング)、『きょう、ゴリラをうえたよ 愉快で深いこどものいいまじい集』(KADOKAWA)、『会話の0.2秒を言語化する』(新潮社)がある。

お互いの担当書・著書について

——お二人がちやんと話すのは今回が初なんです
水野 はい。でも、僕はハヤカワ新書の立ち上げ前から一ノ瀬さんのことは存じ上げていました。「自分の『癖』に刺さるものを出してくれませんか」とずっと思っていて。言語系でいえば、『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』(ハヤカワ文庫)ですね。文庫化、本当にありがとうございます！

一ノ瀬 ありがとうございます。恐縮です(笑)。「ゆる言語学ラジオ」が早川書房の本をけっこう取り上げてくださることもあり、僕も水野さんのことは前から存じ上げていました。たしか最初に見たのは、福田純也先生と第二言語習得論について話す回(二〇二一年)で、「めっちゃおもしろい人たちがいるな」って思いましたね。
水野 ありがとうございます。



『会話の0.2秒を言語化する』
水野太貴 著/新潮社

会話で相手に返事をするまでの間に、頭の中でなにが起きているのか？ ウサイン・ボルトからマンガ『アカギ』まで、多数の事例を交えて解き明かす。

り方』などの自己啓発要素を入れましょう」って言うと思うんですが、そういった要素がないのもすごくいい。

あと、各章を印象的な実際のエピソードで始めるのは、海外のポピュラーサイエンス(専門的な科学知識を一般の読み手に届けるジャンル)の書き方を意識されたのかなと思って。

水野 めっちゃしました！ 僕はポピュラーサイエンスが大好きなんです、いい本は雑学から話が始まるんですよ。たとえば、『言語はこうして

生まれる——「即興する脳」とジェスチャーゲーム(新潮社)も、第一章の頭に十八世紀、クック船長が南米大陸の南東端に到着して、まったく言葉が通じない現地人とコミュニケーションを試みる話から始まる。そういう雑学で読者を引き付けたいと思ったんです。

ポピュラーサイエンスへの愛

——そんなお二人の読書遍歴を伺いたいのですが。



『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』
ガイ・ドイッチャー 著、棕田直子 訳/
ハヤカワ文庫NF

古代ギリシャ人には世界がモノクロに見えていた？ 言語が認知に与える驚くべき影響を解き明かすポピュラーサイエンス。

水野 最初は辞書ですね。小学生のころに、ことわざ辞典、国語辞典、漢和辞典などを読みあさりました。とくに漢字に関するものが多かったですね。一ノ瀬さんはどうですか？

一ノ瀬 小学生のころは『デルトラ・クエスト』(岩崎書店)、『ハリ・ポッター』(静山社)などのファンタジー系でした。あと『世にも不幸なできごと』(草思社)。

水野 あー、一緒の世代です(笑)。一ノ瀬 中学時代は勉強が忙しくてあんまり本を読まず、高校でミステリー小説を読みだしました。綾辻行人の『十角館の殺人』(講談社)とか、我孫子武丸、歌野晶午、伊坂幸太郎、道尾秀介あたりは新刊が出るたびに読んでましたね。